

2022年9月5日

立教大学国際学術研究交流制度
2022年度「派遣研究員」報告書

1. 派遣概要

所属・職	文学部・教授
氏名	浦野 聡
派遣機関名	Department of Geography, Faculty of Arts and Sciences, Suleyman Demirel University 所在国：トルコ
研究テーマ	トルコ共和国アフィオン県アカルチャイ川形成盆地の生態的・歴史的環境変化が人類の経済活動に与えた影響の調査
派遣期間	2022年7月26日～2022年8月25日（31日間）
研究経費	672,910円

2. 派遣期間中の活動

離日日および帰国日を含め、派遣期間中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。

活動内容記入例）〇〇に関する調査、〇〇氏と研究討議、共同研究、講演、視察等

*派遣先での研究に加え、「派遣先機関と本学との学術協定締結（学部間・研究所等間を含む）に資する活動」を行った場合は、該当する活動内容に※を付してください。

年月日	活動内容
2022年7月26日	離日
2022年7月27～ 28日	Suleyman Demirel University において Cetin Senkul 氏と研究討議
2022年7月29日	Sagir koy における Xenoï Tekmoreioi 遺跡調査
2022年8月1日	Uchoyuk 考古学研究所において Senkul 氏、Kocak 氏らと研究討議
2022年8月2日	Afyon Archaeological Museum で碑文調査
2022年8月3日	Karamik 沼沢においてボーリング調査
2022年8月4～9 日	Eber 湖周辺調査
2022年8月10～ 21日	Tlos 遺跡城壁調査
2022年8月22～ 25日	Lycia 西部遺跡城壁予備調査

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果、今後の研究の展望、本学と派遣機関との研究交流にかかる成果、展望等を記入してください。

スレイマン・デミレル大学のチェティン・シェンクル准教授は、現在、アメリカのチームやベルギーのチーム、またトルコ国内のチームと、過去の気候変動に関する共同研究を遂行中であり、氏の湖底土壌の化学的、花粉分析的調査の実績は、世界各国で認められ、少なくともトルコ国内における過去 2 万年におよぶ気候変動調査の最新データは、シェンクル氏のもとに最初に集まるといっても過言ではない。私も、19 年以降、3 か年にわたり、トルコ中西部アフィオン・カラヒサル県の Eber 湖・Akarcay 川における調査を共同で行い、現在は、その分析の最終段階であるが、氏の弟子のユヌス・ボズクルト氏を含め、共同調査の評価、および、課題の策定を行った。われわれの調査地点は、アナトリア半島の中央高地の西端に位置しており、古代において大都市が発展した西方・南方の地中海性気候地域とは異なる、ややステップ寄りの気候地域である。そのため、シェンクル氏の行っている大メンデレス川プロジェクトの研究成果が続々と明らかにしつつあるような、劇的な栽培植物の植生の変化は示さないのであるが、それだけに、気候変動や地震などの大規模災害に対して、そこに住むひとびとの生業は、強い耐性を持っていたと評価されうるかもしれない。その一方、この地域は、大理石の代表的産地のひとつであるので、都市文化が衰退する中世以降、大理石生産産業も後退を余儀なくされたはずで、そのことが、土壌分析によっても支持されるような成果を期待しているが、今の所、はかばかしいデータは示されていない。

そうした手詰まりを打破するべく、同地域の周辺湖沼にまで調査地点を広げるとともに、考古学発掘チームとの協業する必要性が討議され、急遽、ウチホユック考古学研究所のオズデミル・コチャック教授らとの緊急会議を組織してもらった。同チームとの共同で、湖底土壌だけでなく、旧河川沿いの土壌を採取し、化学分析・花粉分析だけでなく、土壌の粒度分析などを加えつつ、過去の湖沼・河川の水系を再構成する計画がまとまったところである。さしあたり、1 年間でどこまでできるか、現在、メールやオンライン会議を通じて、詰めている最中であるが、古代のフリュギア、現在のアフィオン・カラヒサル県全域に及ぶ大きなプロジェクトに発展する可能性があり、期待は大きい。

8 月 10 日からの二週間は、シェンクル氏と相談の上、旧知のアクデニス大学教授タネル・コルクート氏のもとで、実際に大理石・石灰岩が、都市遺跡（とりわけトロス）において、古代から中世にかけ、どのように使われ、また、どのように調達されていたかについて、本学深津行徳教授の研究プロジェクトのメンバーとともに、石灰岩等の非破壊検査、および、城壁石材の石組みの三次元データ集積を行った。特にコルクート氏との意見交換の中で、石材が盛んに使われたローマ帝政時代には、地場産の石材が多用されつつ、装飾的観点から用いられる高価な石材は、十分に遠方からも運ばれてきていたこと、その一方で、都市の規模が縮小し、城壁で取り囲まれるようになる古代末期から中世にかけての時代は、地震等で崩れた廃棄建造物からの転用材（スポリア）が使用される傾向が強いことが確認された。

現在、トルコに限らず世界の科学界では、「現地で、非破壊検査を」という傾向が強まっている。すなわち、文化財に限らず、それぞれの国で採取されたあらゆる試料は、その国の国民の財産なので、現地で分析すること、しかも可能ならば、破壊を伴わずに分析するべきという認識が広まってきているのである。私の研究分野は歴史学であるが、考古学や古環境学との境界領域に関わる以上、上記のような研究動向に鈍感ではいられず、歴史周辺科学においても、ますます、現地調査と現地の大学等研究機関での分析作業が必要になるであろう。スレイマン・デミレル大学は、新興の大学ではあるが、文理融合の促進や最新の応用科学分

析のフォローアップに注力している大学であり、シェンクル氏のような優れた研究者のもとで、最新の分析装置を用いて、高度な研究を行う体制が整いつつある。シェンクル氏は、「日本からも大学院生が来て、研究の発展に貢献してくれると嬉しいし、また、博士論文に至る指導体制も整えられる」と確言しており、本学から願い出てでも提携関係を取り結ぶに値する機関と考える。

